

14

新しい学びの環境の構築とグローバルリテラシーの育成

— ICT の活用と国際交流活動を通して —

武 沢 護 (早稲田大学高等学院)

1 はじめに

21世紀に入り、日本を含めアジア、ヨーロッパ、アメリカなど多くの国や地域はグローバル化した高度情報通信社会を迎えている。そして次世代が直面するであろう課題は地球規模のものであり、それらは地球環境問題、平和問題など、国家を越えて議論し、問題を解決していかななくてはならない。このような状況に対応するため、次世代を担う若者の教育の重要さはますます増してきている。特にわが国の中等教育における国際化、情報化に対応する取り組みは喫緊の課題である。

そのためには、まず中等教育での学習スタイルの転換が要求される。従来、学校教育で主流であった知識獲得型の学習だけでなく、自らが学ぶ姿勢を確立し、問題を発見し、その問題を分析し、そして課題を設定して解決するという課題解決型能力を育成することが重要となってくる。

次に、若者の国際感覚の育成も重要である。世界中の若者と交流することで、英語力の向上はもちろんのこと、それぞれの国や地域の文化や歴史、価値観、宗教観などの違いを相互に理解し、お互いの違いをしっかりと認識することが求められる。

そして上記を達成させるために ICT (Information and Communication Technology) を効果的に活用できる能力の育成も不可欠になってくる。これらの能力はいわば「グローバルリテラシー」とでもよばれる能力であり、これらの育成を目指すことが重要な課題となる。

今回、東京私学からなる CCEA (Cross-Cultural Education Association) という国際交流の活動を軸としたグループを組織し、2008年度からの活動を踏まえ、参加校の生徒の主体的な学びの環境の構築のため、上記の視点を重点に研究および活動を推進した。

2 これまでの経緯

2.1 2009年度

日本私学教育研究所委託研究員 (馬場秀行 慶應義塾女子高等学校教諭)

「イギリス・台北の中学生との交流遠隔学習 —英語教育への ICT の利用—」

2.2 2009年度

パナソニック教育財団実践研究助成

国際交流及び e-Learning 推進グループ (代表: 馬場秀行 慶應義塾女子高等学校教諭)

「中等教育の国際交流及び語学教育における e-Learning 推進」

3 研究の目的

・学年や学校を越えた学びの場の構築

都内私学の生徒の自主的・主体的な運営による CCEA プロジェクト活動を行うことにより、学年を越え、学校を越えた交流を推進し、従来の教室での学習の枠を越えた学びの場を構築する。さらに、プロジェクト活動においては地球規模の課題についての議論を通し、課題解決型の能力を育成する。

・国や地域を越えた学びの場の構築

さまざまなイベント交流企画の実施を通して、日本国内だけでなく、アジアをはじめとする諸外国との共同プロジェクトを実施することにより、学びの場を国際的な状況に構築し、より広い視野をもったグローバル化に対応する能力を育成する。

・グローバルリテラシーの育成

プロジェクトのあらゆる活動の場面において、英語力の向上はもちろんのこと、異文化との交流に必要なわが国の歴史・文化理解を促進し、さらに ICT を積極的に活用することでプレゼンテーション力、コミュニケーション力、情報活用能力を育成する。

4 研究の方法

麻布中学高等学校、鷗友学園女子中学高等学校、渋谷教育学園渋谷中学高等学校、慶応義塾女子高等学校、早稲田大学高等学院の生徒と教員からなる交流団体を組織し、教員の定期的な研究会と生徒の主体的・自主的な交流活動を実施し、次の活動を柱として研究を推進する。

・プロジェクト活動（学習と議論）

社会、文化、科学3つのトピックに分かれ少人数のプロジェクトチームを編成し、現在地球規模で問題になっているテーマについて取り組む。

・イベント交流企画（諸外国や他の団体との交流）

プロジェクト活動などで得られた成果をもとに、ビデオ会議の実施や国際的な会議などに参加し、海外の同世代と問題解決に向けて議論し、活動の輪を広げる。現在、韓国の高等学校や都内にあるインターナショナルスクールとの交流を計画している。

5 活動の概要

5.1 インターナショナルスクールとの交流

今年度は、都内にあるインターナショナルスクールとの交流を計画し、4回実施した。今までは SNS やビデオ会議システムを利用した交流を行ってきたが、時差や学校カレンダーの違いにより、なかなかスムーズな交流ができなかった。そこで、今年度は都内にある西町インターナショナルスクールと、聖心インターナショナルスクールに協力を得て、交流の場を設定した。

5.1.1 西町インターナショナルスクールとの交流

西町インターナショナルスクールは男女共学の幼稚園児から9年生までの児童生徒が在籍し、カリキュラムは米国が基本で、英語を中心に授業が行われている学校である。さまざまな文化的な活動を取り

入れており、日本語や日本の文化に関する授業も実施している。今回は日本の文化を紹介する正規の授業にゲストティーチャーとして我々のグループの生徒が参加した。

【交流の概要】

日 時：2011年9月23日

テ ー マ：日本文化配達人

対象児童：小学3年生

参 加 校：鷗友学園女子高等学校、渋谷教育学園渋谷高等学校、早稲田大学高等学院

内 容：日本の高校生によるプレゼンテーション、日本の高校生との交流（ゲーム、折り紙、和菓子の試食など）



西町インターナショナルスクールにて

5.1.2 聖心インターナショナルスクールとの交流



聖心インターナショナルスクールにて

聖心インターナショナルスクールは英語で教育が行われている私立のカトリック系女子校で、1年生から12年生までが学んでいる。およそ45カ国からの550人の学生が在籍し、教師の出身国も15カ国以上と、国際色豊かな学校で非常の質の高い教育で知られている。今回は今年から始まったC21 (21th Century Skills) という授業に参加した。これは、アメリカの教育プロジェクト「The Partnership for 21st Century Skills」が提唱している考え方に基づいて聖心が行っている授業である。日本の「総合的な学習の時間」に似ている教育プログラムである。

【交流の概要】

日 時：10月10日（10年生）、11月3日（12年生）、11月23日（9年生）

テ ー マ：21th Century Skills

参 加 校：麻布高等学校、鷗友学園女子高等学校、慶応義塾女子高等学校、早稲田大学高等学院

内 容：Crossschool の紹介（CCEA を Crossschool と改名）、グループディスカッションへの参加

5.2 国際交流団体 iEARN、AYV プロジェクトへの参加

iEARN (International Education and Resource Network) とは、インターネットを活用した非営利組織の国際交流団体で現在125カ国、30,000以上の学校が参加し、様々なプロジェクトを SNS ベースで行っている。今回は iEARN の日本支部 JEARN の理事長（当時）である高木洋子さんより直接、この団体の活動の概要の説明を受けた。団体が運営している SNS でのプロジェクトに今後積極的に参加する予定である。



iEARN 高木さんのお話

また、Adobe 社と iEARN が共同で行っている AYV (Adobe Youth Voice) プロジェクトにも参加

し、メディアコンテンツ作りを行い、世界中の若者たちとのメディアを通して交流を行う予定である。

5.3 クラウド型学習支援システム“manaba folio”での交流

これは個別の学校との交流である。相手の学校は韓国ソウル市にあるハナ高校である。ハナ高校は早稲田大学高等学院との国際交流協定校であり、そこでの活動をもとに鷗友学園も参加した。

この交流では、朝日ネットの「manaba folio」というクラウド型学習支援システムを利用する。このシステムは参加が閉じられたメンバーで利用できる学習システムである。ポートフォリオ機能を



manaba folio の一画面

をベースに掲示板機能、SNS 機能をもち、生徒たちによるプロジェクト型学習をサポートできる。次年度はこのシステムを有効に活用して韓国ハナ高校との協働学習をさらに進めたい。

6 新しい学びの空間の構築に向けて（成果と今後の課題）

わが国の若者の教育の中心はおもに学校教育にあり、従来は「学校」という限られた空間で行われてきた。しかし、21世紀の若者に身につけて欲しい能力を考えると、この限定された空間では不十分であることは間違いない。この一年間、国際交流を通してさまざまな取り組みを行ってきたことを踏まえて、次に課題を挙げる。

・さまざまな学びの空間の構築

都内という環境を利用することで、都内のインターナショナルスクールとの協働活動は非常に有意義であった。日本に居ながらにして可能な国際交流のスタイルである。また、Web 上のシステムの活用も非常に有効である。特にクラウド型機能を利用することでさまざまな活動可能になるが、実際にはまだまだ課題が多い。

・生徒たちの自主的な学びの促進

従来からこのグループは生徒の自主性が非常に強く、今回も複数の学校のリーダーが中心となってこの活動をコーディネートすることができた。今後とも推進していきたい。

・交流から協働へ

お互い違う歴史や文化をもつ若者同士が単なる国際交流の枠を越え、これからの時代における地球規模の課題や問題解決のために協働して行う活動が不可欠になる。聖心インターナショナルスクールやハナ高校との取り組みはまだ始まったばかりだが、このような国や地域を越えた若い世代の活動をさらに支援していくことがますます重要な課題となってくる。

複数の学校からなる東京私学グループは、日常的な活動を円滑に進めることがなかなか難しいが、各学校の生徒リーダーの自主的な活動に支えられてここまで継続してきた。今後ともこの活動を支えるため関係教員とも連携を密にして進めていきたい。なお、本研究は財団法人日本私学教育研究所の平成23年度委託研究事業の助成を受けて実施したものである。